

随想 思うがままに――

医者と坊さん

早川 一光

(京都・西陣堀川病院副院長)

臨 床

医者という商売は因果な商売である。

「治して元々」という仕事であるので元々戻すのが商売。以前とちっとも変らない状態にして「いくら」。

ちっとも喜ばれない。

まして治らなかつたら「やれ、ヤブだ」

「薬、九層倍」といわれる。

時に一生懸命、命を留めたり、元へ戻していると、

「いつまで生かせておくのだ」

「いい加減にしたらどうだ」

まして高齢お年寄りになると、

「殺生な、歩けるようにしてしまつて」。

ねたきりの方が看護し易いのにとボヤかれる。

救つておこられ、落して叱られ、両ビンタはられているような仕末。

そりゃ面と向つては

「ごくろうさま。おかげ様で。」

「お世話にいろいろなりました」と言つては下さるが、心の内では何を考へているか、どう思っているのか、さっぱり分らない。

助けていいのか、いけないのか一瞬迷うことがある。

この診断の方が、治療よりも難かしい。

この一瞬の決断がようやく分りかけてきたこの頃、フトふりかえると臨床三十年余になっていた。

いや、逆にいえば、病む人の床に臨むこと三十年で、やっとこの診断がつくようになった。

この診断のよりどころは、その人の三十年の生きざまをじっと見つめてきたことと、その人を取り囲むまわりの人たちの所作振舞い、ものの考え方、暮し方を目を離さず見てきて始めて分る。つまり、

その人と共に生きて——共歩して——やっと分るようになった。その人の体を診るのでなくてその人の「心」の中に踏み込むような医療を続けてきて始めて、この一瞬の診断がつくようになった。

臨床ということが文字通りその人の「床」に臨む——産の床、死の床、悟の床、無の床、苦の床……にいつも臨んで、ようやく、

「人間ってなあ。これでええんだよなあ」と、その人に無言でうなずくことが出来るようになった。そうするとその人も、

「うん。ここまで来たもんなあ」とこれ又言葉にせず
にうなずいてくれる、そういう互いの了解、合点、納得
というものが、自然ににじみ出てくる、そういう間柄に
なるようだ。だから医者が臨床を忘れた時、病人の枕元
に立つことをおこたった時が、医者と病人の間に不信が
生れる時だ。

小さい時、家のおばあさんから、日本むかし話をよく
聞かされた。

「ムカシ、ムカシ、アルトコロニ……」そういう話
の中によく仏さまが枕元に立った、お地蔵様が枕辺にあ
らわれた。そして、

「苦しみや、貧乏を救ったり、慾しがっていた子どもを
授かったり……」。

そんな話をよく聞いた。

横着なわたしは、

「ソナ、アホナコトがアルカイナ」と信じてなかった
し、大きくなっても疑いのつるばかりだった。

「枕元に菩薩が立つという事は苦しみの余りの願望であ
るし妄想の一種。幻覚幻聴のたぐいならん。」とも考え

た。

ところが實際、医の道に入り、苦悩をもつ病む人の体と心を診てきてこの頃「待てよ」とハタと忤むようになった。

菩薩とは何だ

私は患者さんを病院で診るより出来る限りその人の住んでいる家に出かけて行って診ることにしている。

なぜなら、患者さんの生活が分るからである。生活というよりはその人の「生きざま」が分るからである。

往診してみ始めてその人の歩んできた道が逆にたどることが出来る。つまり映画を逆にする、ビデオテープを廻してその人の歴史を、いやむしろその人の「心」をかいま見ることが出来るからである。

生活はかくせない。姿は化粧、着類でかえられても、長年住みしみこんだその人の生活はおおうべくもないからである。

そのかくせない「気」にふれて、浸って、そのお家の人たちの人間と人間との間を見きわめて、その人に合っ

た治療の方針をたてることにしている。

前日、急病で宅診した患者さんは、連絡があるうがなかるうが、往診の依頼があるうがなかるうが、病状に応じて必要を感じれば、翌日、往診のついでにフィと立ち寄ることにしている。

点検往診というのがこれである。

或る時、いつものように、

「おい。よくなったかな」と声をかけながら無遠慮に勝手知った患者のフスマをぐいとあけて入ったら、患者さんがびっくりして眼を丸くして私をみつめた。

そして、

「いま、先生を呼ぼうと思ったところです」といった。不思議そうに

「どうして、私が思った事が分ったんですか」と。

私は心で、しめた／＼と喜びながらも、その時義経少しもさわがず、

「うん。私はなんでも知っている。

あんたが思うだけで、直ぐ分る。

呼んでるなど、すぐわかる。

そんなことぐらい、分らないでかな」

と胸を張って鼻の穴をひろげて言い放つ。

「ふーん」という患者さんの枕辺に立ちながら、

「まてよ。これ、どこかで聞いた話だぞ」とフト思う。

そして、

そうだ。子供の時、おばあさんが語ってくれた、そ

う、あの菩薩の話よ。

「仏が立つ」というあれよ、

と気がつく。

「居る。仏が。

祈れば枕元に現れて立つ菩薩とは、自分ではないのか」

おのれが菩薩。まさか。

仏とは自分以外にどこかにあるものと思えばこそ、そんな実在あるのか」と信じもしなかったが、自分が病人に対して菩薩でなくてはいけない、少なくとも、病む人からは、菩薩であれかし」と望まれているのが医師ではなからうかと気付いた。

そう考えるとつらい。

そう思うと重荷だ。

なぜなら、私は菩薩ではない。生の人間^{なま}なんだから。

腹の立つ事もあるし、腹のへることもある。気の乗らないこともあり、さぼって休みたい時もある。

到底、望まれるような菩薩になり切れない。なりきれないものが、そうあってほしい」と望まれても期待を裏切るだけである。

ここがつかいところよ。

誤診もし、救けられもせず、期待にそえない連続であっても尚、

「仏であってほしい」と期して待たれる医師の道のつらさよ。

そう思いつめてくると、お坊さんの何と、うらやましい事よ。

お坊さんに聞くと、

「坊主は仏ではない。仏と人間とを出あいさせる役よ」と言う。

「そんなズルイ商売アルヤロカ」と疑う。

医者は救う人そのものであることを望まれる。

その役からのがれて、救う人は別にオワス」と振るわけにはいかない。

少なくとも苦痛を和らげるために全力をつくして手を打たねばならない。時には背中をさすり、手をそえて、枕頭から二十四時間、離れられない事もある。

「救う人はアッチ」と言いたくなる。

「誰かに祈れ」と叫びたくなるが、祈れと言われる人そのものにも自分がなくてはならないきびしさよ。

お坊さんが、仏に向って灯明をあげ、

「苦悩を持つ人を救われん事を——」

と経をあげる後姿を時々見つめて、

「私も祈る人」になりたいものよと思う。

「何さ、俺が仏よ」とおこがましくも考えて、そうなるうと努力して、そうなり切れない己を発見して恥じ入り力をおとす。

そして又、

「何くそ、私が菩薩よ」と思いなおして、
今日も、病む人の枕辺に立つ。

最後の一息

仕事上、人様の「死にさま」に立ち合う。年令、性別、職業、貴賤を問わず、人間はかならず死んでいく。百パーセントの確立であって、こんな確実な出来事はない。

ただ、皆さんが平気な顔をして生きていかれるのは、その死を意識しないだけである。

勿論、誰もが「死ぬ」ということは知っておいででしょうが。

みなさん、まさか明日は死ぬまい」と思っておられるから笑って生きておいでです。

「お前は明日死ぬ」と分っていたら、誰ひとりとして今、落ちついてはおれないだろう。

今年の冬の大雪で、山の遭難の悲報をきく。雪の中に孤立して、救けは来ず、たべものはなくなり、尚、しんと方角も分らず、雪が降りつづくと、人間たいていじっとしておれずに、裸になってあちこち走り廻りたくなるんだと、書いてあった。

その気持、何となく分るような気がする。

あの時、少しも騒わがず、じっと動かず耐えておれるお人は、大した人間なんだと思う。死を覚悟しつつも意識しない。いや、むしろ開きなあって、それもよしと思ひ抜いた人が、案外助かっているのが不思議である。

私たちのような凡人、いざとなったらそうはいくまい。けど、人間だんだん弱つていよいよ最後になって意識を失つても呼吸はつづく。

その呼吸も次第に乱れてくるのを、じっと眺めている私たちに

「最後の人間の一息は、吸うて停まるか、吐いて止まるか」

いつも見さだめさせられる。

これも、因果な仕事である。

皆さんは、どちらだと思ひだろうか。

「さあ、分りませんな」

「死んでみないと何とも言えせんわ」

「考えたこともおへん／＼」

そりやそうでしょうよ。

「そんな事考えたら夜も眠れなくなる」とはどこかで聞いた漫才まんざいのセリフ。

「どちらどす？」と問われれば

「そうですね。やっぱり吸うて停まりますな」と答える。

自分が息をしている事も気がつかない皆さんの何と幸福な事よ。それは皆さんが健康な証拠、ところが病気が重くなるか、だんだん死に近くなつてくると、肩を使ひ、鼻翼をひろげ、やがて最後は下顎を使って少しでも深くたくさん空気を吸いこもうと努める。

これを私たち医者は、肩呼吸、鼻翼呼吸、はては下顎呼吸と名をつけて、次第に終末に近くなつていく速度を見きわめ計る。

これも又因果な医者いしやの神経だと思ふ。

下顎がガクガク動いて、やがて部屋の中の空気が少しでも慾しいと願うように息を吸いこんで力つきて停まる。

これを白々しく見守り見定めて、

「今ですよ。これまで／＼」

と宣告するのも私の仕事。

因果な商売です。

「わっ／＼」と一斉に泣かれるか、

「ごくろうさまでした」と静かに言われるか、それは、

皆、その人その人によってちがう。この頃、*「それでい*

*い」*と受け入れられる自分になっている。

最後の一息を見守っていつも思うことは、

「人間って業^{ごう}に出来ているんだなあ。死ぬまで息をして
いなくてはならないもの。」

*「そりゃ当然よ」と言われれば*そうかもしれないが、見
つめる私にとっては、人さまの最後はみなすばらしくお
ごそかできびしいものだと感じる。

何故なら、

「人間の体って、死ぬようには出来てないんだ」と思う
からだ。

最後の最後まで、*「死んでたまるか／＼」*と生きようと全
力を振りしぼる人間のつくり、思わず姿勢を正さざる
を得ないからだ。

生きて生きて生き抜こうとする人間の体の闘いの迫力

に圧されつつも、力つきて吸うたまま吐き出せず止る
最後の一息。

この一息を節に、刻々と血の気を失ない、冷めたくな
っていく体の変化の早さを眼のあたりにして、

この壮嚴な死の瞬間——死との闘い——を孫も子供も
親類縁者も、みんなが襟を正して見つめる必要があると
つくづく思う。

この頃、子供が親の死に目、祖父母の死に立ち会わな
くなったことが、

「死の何たるか」を体で知る機会を失っているのだと思
う。

だからこそ「死」というものを軽々しく見、又は自分
が死ぬことが何と大切な重大事であるという気持がなくな
っていくひとつの原因のような気がしてならない。

もともと人間の死というものが何ものにもかえられな
いその人の尊嚴なセレモニーだということをあらためて
見直していい。

これからも、どんどんみんなが人の死に立ち会うべき
だと思う。

昔の人たちは、きっと自分の家で住いで、親、年寄り、親しい人たちの死に立ちあい、枕辺に円座し、その一瞬をいろいろの感動と感激をもって見つめていたのであらう。

だからこそ最後のことを

「息を引き停る」と呼んだ。

引いてとまった事を目と肌で感じとったひとことなのであらうか。

私は、数百のあの一瞬に立ち会いながら今も尚、初めての時と同じように、ひとりひとりの死にさまに感動を覚えて見守っている。

その時いつも思うこと

あのすばらしい一瞬に立ちあつていつも思うことは、「どうして、あの時にお坊さんが傍に居ないんだろな」という事。

死にゆく人は、私が居るだけで本当に安心してわかれていくのであらうか。

「助けてくれ！」とほんとは願いつつも助け得ない私に

深い失望と怨みを残して去っていくのではなからうか。命を救うべき医師を枕元に置きながら、常勝ならず「常敗の将―医師」に怒りの心をぶつつけながら別れていくのではあるまいか。

死への苦悩、死の恐怖とおののきをそのまま抱きながら、ひきずられるようにして息をとめていくのではなからうか。

医者とは、人間の苦痛はとることが出来るが人間の苦悩が救い得ない。

人さまの死への――生への――苦悩を解放できない私の力なさに、私は嘆き悲しむ。

人間の苦悩を助けるもの、人間の死への悩み苦しみを救うもの、

これこそお坊さんの仕事ではないのか。

人間の一番大切な死の瞬間の枕辺に、坊さんの姿がないのも居ないのは何故なのか！。

逃げてゐるのか。避けてゐるのか。

それとも、立ち会つても所詮「仕方なし」

「生死の中に仏あり、生死即ち涅槃。

生死として厭うべきもなく、涅槃として欣うべきものなし。

是時、初めて生死を離るる分あり……」

衆生。生死にとらわれるから悩むのだ。

どちらでもよし、早く、悟れ！」

と、遠くから、ガラスの外から教えるのか。

作麼生！

仏はいづこにおわす！

ほんとに衆生の死の苦悩を救う仏は、いづこ？

衆生は文句なしに仏を捜している。

この声が、聞こえないのであろうか。――

今のお坊さんは、私が死亡診断書を書いてから現われる。

遅し！。

衆生が生きている間にこそ、仏にあわせてほしい。

聞けば、釈尊は、すでに三千年前に人間の老・病・生・死の四苦にとりくみ、この苦悩から人間を解放すべく努力されたという。

今の僧に、釈尊ありや。

現代の仏、いづこにおわす。

死にとおす

診察室に入って、体を診るたびに、

「死にとおす。早よ、お迎えこんかいな！」

と言うおじいさんが居る。

「おじいさん。六十七や八で、人の顔みたら、死にとおす。死にとおすと言わんとき。今は日本人の寿命はおばあさんが七十八、おじいさんが七十四、

まだまだ死ねますかいな。生きて生きて生き抜かにや！」

と言えは、

「先生、何言うてはりますな。

もう、したい事してきました、この世に何の未練もおへん。

いつ何時、お迎えが来ても平気です。」

と言いつ放つ。

こういう人に限って、毎日病院に来て、注射と薬を一杯もって帰っていく。

このおじいさんが病院の玄関を出ていくところをじっと見ていると、堀川通りで自転車にぶつかりそうになつて、

「こりゃっ／＼ 氣いつけんかあ／＼

けがしたらどうするんのや／＼」と、どなつて、けんかしてはつた。

「ありや。診察室とえらい違いだな。

人間って二階から地上へ降りるとあんなにころりとしがうのかな／＼

と、ほとほと感心する。

その上、このおじいさん、横断歩道を渡りかけて赤信号となつて、自動車が出来たら、あわてて歩道にとんで帰って来はつた。

つくづく眺めて、

「この世の中に未練がなかったら、帰ってこんでもええのにな／＼」と思う。

そして、

「いや、人間って死ねる体に来てない。人間の体のつくりは、生きるように出来てます。病氣と闘いつつも、

死と対決しつつも、最後まで生きていくようつくられてる事を、みんなが、早く知ってほしい／＼」と思う。

病原菌が体の中に入れば、これを囲み、食ひこらし、菌の發育を阻止し、或は、菌が居ても無害にしてしまう力をつくる作業を、人間が知ろうが知るまいが体の中で行われていることを知ってほしい。

その力を、死と闘う力が実はず、命／＼なんだということに分つてほしい。

苦と闘うことが即、生（命）なんだと知ったとき、生きる尊さと、厳しさと、そして

苦をのりこえた時が、楽しさと喜びとを感じるんだということを、みんなが合点してほしい。

そうしたら、生きてきた、生きている、生きていくひとりひとりの人間が、互いに尊重し合いながら助け合いながら、いかなくはならないという事を、理解してくれるのではないかなあと思う。

この事を教えて下さるのが、本当はお坊さん——宗教人——ではないのかなあ、ほんとにつくづく思っている。（昭和五十六年二月）